

The Original Location of the Uriyangqai Mongols before Moving South

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-11-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 特木勒, 小沼, 孝博 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24121

南遷前のウリヤンハイ・モンゴル人の遊牧地について

特木勒 (Temür)
(小沼孝博訳)

一

洪武二年(一三八九)五月、明朝は「泰寧・朵顔・福餘の三衛指揮使司を兀良哈の地に置き」、あわせて「阿札失里を泰寧衛指揮使となし、塔賓帖木兒を指揮同知となし、海撒男答溪を福餘衛指揮同知となし、餘脱魯忽察兒を朵顔衛指揮同知となし、それぞれに所属の部を領せしめ、以て畜牧を安んぜし」^①めた。これが、明朝が東モンゴルに設立した三つの羈縻衛所、すなわちウリヤンハイ三衛と総称される泰寧衛・福餘衛・朵顔衛である。この三衛の前身は、それぞれ元朝の朵因顔温都兒兀良哈千戸所・灰亦兒等處怯憐口千戸所・石(台)州等處怯憐口千戸所であった。^②では、明初における三衛は、それぞれどこに位置していたのであろうか。

一九二九年、和田清は日本の『史学雑誌』上に「兀良哈三衛の本拠について」と題する論文を発表し、そこで上述の問題について詳細な考証を試み、泰寧衛は洮兒河流域、福餘衛は瑚裕爾河流域にあったと指摘し

た。朵顔衛の原住地については、この和田論文では最初、現在のジャライト旗内の綽爾河流域と朵顔山に比定している。和田清の研究の影響は大きく、『中国歴史地図集』は、朵顔衛の明初の分布位置を内モンゴルのジャライト旗内にあったとしているが、これは明らかに和田清の研究を参考にしたものである。

また烏蘭は、自身の著書『蒙古源流』研究』において、「一三二二年(元・延祐三年)、元朝は朵因温都兒兀良哈千戸所を設け、その地は朵顔山一帯にあった。朵顔山は『游牧記』における「朵雲山」であり、現在の内モンゴル自治区ジャライト旗内にあり、ボグダ山と称されている。明初、明朝の朝廷は一三八九年に、この地域の人々をもつて朵顔衛を設立し、その首領の脱兒忽察兒を指揮同知として、衛の職務を掌らせた(『明太祖実録』洪武二年五月癸巳条)。そしてこれらの人々は、その後も自らを元々の部名で呼んでいたので、明人によって「五両案」と音訳された」と述べている。この「五両案」とは、ウリヤンハイのもう一つ別の漢字音写である。このように、朵顔衛の明初の在所に関する問題につ

いて、烏蘭も和田清の見解の一部を参考にし、受け入れている。

しかし、和田清の文章を通読してみると、後述するように、朮顔衛の地を朮顔山近辺ではなく、基本史料の記載から乖離して、最終的には、遙か遠方の帰流^{グイレル} (Güirel) 河とその付近の索岳兒^{ソヨルジ} 濟^{ソヨルジ} (Soyolji) 山に比定するに及んでいる。陳正祥編著『中国歴史・文化地理図冊』の「明代初期的疆域」は、明初の福餘衛を嫩江流域に、朮顔衛と泰寧衛を嫩江以西、大興安嶺南麓に描いている。これ自体は間違っていないのだが、ただしこの図には綽爾河と洮兒河が描かれていない。また特に注意を引くのは、泰寧衛に比して、朮顔衛の位置が非常に西に偏って描かれていることである。⁽⁴⁾ これもまた和田清の影響を受けたものと考えられる。

和田清は日本モンゴル史研究の大家・泰斗であり、その『東亜史研究(蒙古篇)』はモンゴル史研究の記念碑的著作である。特に明代モンゴル史研究においては、その重要性は久しく学界の知るところとなっている。しかし、學術史の重要な一環として、和田清のウリヤンハイ・モンゴル人の遊牧地に関する考証結果には、なお慎重に修正を試みる余地があるといわねばならない。

二

朮顔衛の地理位置に関して、最も基本となる史料は、清代の学者張穆の『蒙古游牧記』、及び『華夷訳語』所載の「脱兒忽察兒書」^{トルホチヤル} であり、もちろん和田清もこれらの史料に注目し、利用している。本稿における検討もまた、この両基本史料より着手せねばならない。

『蒙古游牧記』巻一には、ジャライト「旗の北百二十里に朮雲山があり、

……旗の北八十里に綽爾河がある」と記されている。⁽⁵⁾ 『華夷訳語』所載の「脱兒忽察兒書」が述べる大意は、「我等ウリヤンハイの民は林木中の民にて、国王、洪福あるチンギス・カンの時より以来、額客多延温都兒^{トクダエン・ドゥル}・朮木連^{トクモレン}に〔居住し〕、今に至るまで離れたことがない。さらに累朝皇帝の代々、かねてから献納する窩鷹土豹等の皮貨は、毎年多少〔を問わず〕、力を尽くして大都に献納してきた」云々、というものである。

和田清は論文中、上掲の史料を引用したあと、「この朮雲^{トクユン}山こそ即ち朮顔^{トクヤン} (Doyan) 山で、綽爾^{トク} (Cho) 河が即ち朮^{トク} (Shuo) 河なのだろうと考へた。蓋し泰寧衛が洮兒河畔に在り、福餘衛が瑚裕爾河上に在るときに、残る朮顔衛を以て綽爾河流域と考へることは、必ずしも不可ないようだからである」⁽⁷⁾ と述べる。このように和田清は、おそらく「朮木連^{トクモレン}」は綽爾河であり、「額客多延温都兒^{トルホチヤル・ドゥル}」は「朮雲山」であろうから、朮顔衛の位置は内モンゴルのジャライト旗の綽爾河流域にあたるかと推測したのである。和田清はここでいったん結論に達したわけであるが、同時になおその結論には満足しておらず、以下のように論証を続けている。

けれども尚ほ考えて見るに、朮河の音は綽爾河とは大分隔たりがあるやうである。のみならず、朮顔衛は他の二衛の帰降が未だ十分定まらなかつた時に、既に率先して順服したこと、上掲脱兒豁察兒の書にも窺はれる通りで、後には最も夙く最も近く明の辺上に移つた部落である。然るにそれが洮兒河畔の泰寧衛よりは一段奥地の綽爾河辺に居たといふのは、果たしてどうであらうか。泰寧衛の地は極めて広くて、後に永樂四年十月その地を割いて密陳・ト刺罕・蘇温

河衛を置いたといふ。綽爾河の方面は寧ろそれら諸衛の地域でなければならぬ。況して同河の下流域は早く已に永樂の初めから、福餘衛衆の占拠に委ねてゐたことも既述の通りではないか。否、朮顔衛は同じく三衛の中でも、他の二衛と異なつて、最初から明廷に対して忠誠を続けた部族で、その故にこそ、洪武永樂用武の際他の二衛はその酋長を更迭せられた中に、ひとり同一の酋首を戴いてゐることが出来たのである。さういふ部族は皆にそれが直接元室の裔孫でなかつたといふ為めばかりではなく、恐らく必ず明の勢力に近く、その威力を感じ易い所にゐたものと考えなければならぬ。なほ明の張天復の皇興考兀良哈考や明史三衛伝等によると、朮顔衛は遼王・惠寧王と共に降つた朮顔元帥府の後である。元末に特に元帥府を置かれた地方といへば、それは北方山間の綽爾河畔よりは、もつと著しい要衝の地でなければならぬ。朮顔衛の地が特に西方に偏してゐたことは、上掲の「脱兒豁察兒書」にも明見する如くである。⁸⁾

このように和田は、朮顔山は綽爾河流域になかつたのではと疑いを抱いた。その理由は、「朮河の音は綽爾河とは大分隔たりがある」こと、宣徳・正統年間（一四二六―四九）に三衛は次第に南遷して明朝の薊州と遼東辺外の草原を占拠したことの二つである。このうち朮顔衛は古北口・喜峰口外の山区に位置したが、これが和田のいう「最も夙く最も近く明の辺上に移つた部落」であり、かつ「明廷に対して忠誠を続けた部族」であつた。さすれば、もしも朮顔山をジャライト旗域内の朮顔山に比定すると、その位置は洮兒河流域の泰寧衛よりさらに遠く離れてしまい、矛盾が生じることになる。このため和田は、『蒙古游牧記』の記述をあつ

さりと放棄して、帰流河上流に目を移した。そして朮顔山の位置を探るべく、続けて『水道提綱』中の「帰勒里河」の説明を引用し、その上で次のように述べている。

帰勒里河は貴烈・貴列兒・龜刺兒・曲列兒河等につつて元史に散見し、後の大明実録・明史等には屈烈・鬼力兒もしくは屈列兒河等にも作り、即ち洮兒河の南上源である。母朮顔山とは果して何處か詳らかでないが、恐らくは右の烏藍灰河の發源地索約兒雞山の別名ではなからうか。蓋し索約兒雞山は普通に索岳爾濟山に作り、西に哈勒哈河、南に兀勒灰河及び東に帰勒里河の共に發源する所で、興安嶺中この方面に於ける最も著しい名山だからである。その麓を流れる朮河とは、必ずこの烏蘭灰河即ち烏藍古依河の本来の呼称に相違あるまい。⁹⁾

ここに和田清は、正確な「解答」にたどりついたようである。すなわちそれは、朮顔山を洮兒河上流南源の「索岳爾濟山」に比定するというものであつた。『東亜史研究（蒙古篇）』は巻末に「清代蒙古地図」を付し、そこでは朮顔山が「屈裂兒河」上流から遠くない位置に表示されている。陳正祥『中国歴史・文化地理図冊』も、おそらくこの地図を参考にしたのであろう。しかしこれによつて、和田清が「けれども尚ほ考へて見」たことで得た「解答」は、前述した最初の考証結果から大きくかけ離れてしまつたのである。

三

和田清は「朮顔衛の地が特に西方に偏してゐたことは、上掲の「脱兒

豁察兒書」にも明見する如くである」と述べているが、実際はこの文書から「朵顏衛の地が特に西方に偏してゐた」事実は見出しがたい。かつ綽爾河は現代モンゴル語では長母音で ool となるので、和田清の「綽爾(cho)河」の転写は明らかに不正確であり、また「捌(shuo)河」の転写も、後述するように誤りである。「捌(so)」の母音、及び脱兒豁察兒の「脱(se)」の母音は、ともにモンゴル語第四母音を転写したものの、要するに後舌母音の o である。

『元朝秘史』と『華夷訳語』はどちらも、明初に翰林院が養成した翻訳者がつくった翻訳作品である。亦隣^{イリンヂン}真は、『元朝秘史』の「本文は漢字音写を用いたモンゴル語であり、本文横に「傍訳」と称される漢文逐語訳がある。本書全体で一八二節に分かれ、各節の後ろに「総訳」と称される小字・低行の漢文摘訳が付されている。これら音写と訳注はみな明の翰林訳員の手書きであり、十中八九、一三八二年に命を奉じて『華夷訳語』を編写した翰林侍講火源潔・編修馬沙亦黒らの訳作である。明人は本書をモンゴル語の教材となし、通訳・翻訳員の訓練に用いたので、ゆえにこのように多くの加工がなされたのである¹⁰⁾と述べている。

おそらく両書の訳注者は同一人物に違いなく、同時代であるがゆえに、訳音に用いた漢字も大半が同じである。栗林均編『元朝秘史』モンゴル語漢字音訳・傍訳漢語対照語彙』の統計一覧によれば、「捌」は二九回現れるが、すべて後舌母音の音節である so で音写され、例外はない¹¹⁾。そのうち、人名の捌思(os)は八回、同じく人名の捌兒馬罕(cornagan)は六回、形容詞の捌瓊(otan)は三回現れる。その他の用例はわざわざ示さないが、いずれにせよ、『華夷訳語』の「捌」は so と読むと確定

できる。

音節末尾の子音音写については、『元朝秘史』と『華夷訳語』でやや異なる。例えば、『華夷訳語凡例』には「字の傍らに小さく丁の字を注記してあるのは頂舌音である。舌先を上顎に添えてこれを発音する」とある。要するに、訳音漢字の左上の角に小字の「丁」を注記することで、その音節は舌音の l が語尾であることを示している。しかし『華夷訳語』では、「勒」の字を用いて「頂舌音」を示す場合もある。『華夷訳語凡例』には、「字の下に小さく勒の字を注記してあるのは、また頂舌音と同じであり、例えば冰呼莫^勒孫のような類いである」とあり、「勒」が訳音漢字の右下の角に記される点で異なる。これに対して、『元朝秘史』は音節末尾の舌音を表示する際、単に小さな「勒」を用いて示すだけである。

和田清は「脱兒忽察兒書」を分析において、「今印刷の困難を避けて便宜まづその大意を摘訳してみる¹²⁾」としているが、まさにこの「摘訳」の時、この音節末尾の舌音を音写する漢字「丁」を省かせてしまった。「捌」のモンゴル語ラテン文字転写は so であるべきで、これは間違いないであろう。したがって、内モンゴル東部のモンゴル人は、本来長音 ool をもつてこの河を称していた、というのが唯一求められる解釈である。そして、この点は『華夷訳語』中では明確に示されていないかった。

和田清が「捌河の音は綽爾河とは大分隔たりがある」と述べたのは、誤りといわざるをえない。『元朝秘史』中の「捌」字と「綽」字は、ともに so の音であり、例えば「捌兒馬罕」(第二六〇節)と「綽兒馬罕」(第二七〇、二七四節)は、どちらも音写人名 cornagan を音写したもので

ある。後年にいたっても「綽」は従来の用法どおり使われ続け、「綽」の後古音については「爾」で示され、「綽爾河」と記すのが清代の訳音漢字の慣例となった。『華夷訳語』の「朮」の音写のモンゴル語音節は *ool* であるべきで、和田清による漢語拼音 *shou* ではない。「朮木連」と「綽爾河」の二つの語彙の音読は遠くないのである。なお、満達夫校注『華夷訳語』も「朮」の前の「丁」の字を漏らしており、「朮木連」を *so muren* と音写しているが、これも和田清の研究の影響を受けてのことかもしれない。⁽¹³⁾

ここにいたって我々は、以下のような結論を得ることが出来るであろう。すなわち、『蒙古游牧記』に記される「朮雲山」は朮顔山とみて間違はなく、その付近の「朮沐連」は現在の内モンゴルのジャライト旗域内の綽爾河でなければならない。和田清が「けれども尚ほ考えて見て得た結論は成立しないのである。

註

- (1) 『明太祖実録』二九四六―二九四七頁。
- (2) 『元史』卷八十八。
- (3) 烏蘭『蒙古源流』研究(遼寧民族出版社、二〇〇〇年)、二二四―二二五頁。
- (4) 陳正祥編著『中国歴史・文化地理図冊』(原書房、一九八二年)、九二頁。
- (5) 『蒙古游牧記』卷一。
- (6) 栗林均編『華夷訳語(甲種本)・モンゴル語全単語・語尾索引』(東北大学東北アジア研究センター、二〇〇三年)、九六―九七頁。この部分の原文は「大都に献納した」であるが、漢訳本は誤って「上都」としている。
- (7) 和田清『東亜史研究(蒙古篇)』(東洋文庫、一九五九年)、一三三頁、潘世憲漢訳本『明代蒙古史論集』(商務印書館、一九八四年)、一二二頁。
- (8) 和田清『東亜史研究(蒙古篇)』一三三―一三三頁。

- (9) 和田清『東亜史研究(蒙古篇)』一三四頁。
- (10) 亦隣真『元朝秘史』及其復原(内蒙古大学出版社、一九八七年)所収の『元朝秘史』復元本、七三―七四頁(「再録」)亦隣真蒙古学文集(内蒙古人民出版社、二〇〇一年)。
- (11) 栗林均編『元朝秘史』モンゴル語漢字音訳・傍訳漢語対照語彙(東北大学東北アジア研究センター、二〇〇九年)、一二五頁。
- (12) 和田清『東亜史研究(蒙古篇)』一三〇頁。
- (13) 烏・満達夫校勘標音注釈『華夷訳語』(内蒙古文化出版社、一九九八年)、二五六頁。

【訳者注一】怯憐口(怯憐戸)は、モンゴル語の *get-in kumin* (家の人、家の子)の転写とされ、モンゴル領主に私属する「家内奴隸」「召使い」を意味する。詳しくは、小林高四郎「元の怯憐口に就いての疑」(『社会経済史学』七(一二): 一―二二頁、一九三七年)、海老沢哲雄「モンゴル王朝期の怯憐口に關する覚書」(『北海道教育大学紀要』(社会科学編)二〇(一): 四七―六二頁、一九六九年)、ジョーナス(照那斯因)著、松田善之訳・解題「老乞大」中のモンゴル語と關連する語句に対する解釈について(『内陸アジア史研究』二一: 八〇―八一頁、二〇〇六年)を参照。

【訳者注二】索岳爾濟山は大興安嶺山脈の主峰で、ジェリム盟・シリシゴル盟・フロンボイル・ハルハの境界に位置する。



圖「清代蒙古地圖」(部分)(和田清『東亞史研究(蒙古篇)』卷末付録)